

山ノ井南野遺跡Ⅳ

筑後市大字山ノ井所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第86集

2008

筑後市教育委員会

やまのいみなみのいせき
山ノ井南野遺跡Ⅳ

2008

筑後市教育委員会

序

この報告書は、店舗建設に伴って平成19年度に行なった、発掘調査の成果をまとめたものです。当遺跡は、平成14年度以来断続的に発掘調査され、今回の調査が第5次調査となります。

今回の発掘調査は、第1次調査の調査区に隣接する調査区の設定となりましたが、前回の調査では知られていなかった遺構の存在も明らかになり、新しい地域史の一面を垣間見ることができました。本書が地域の歴史解明や、文化財愛護に活用されれば、望外の喜びです。

最後になりましたが、現地での発掘調査から本書の刊行に到るまで、御助力御協力いただいたみなさまに、厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

筑後市教育委員会
教育長 城戸一男

例 言

1. 本書は、筑後市教育委員会が平成 19 年度に実施した山ノ井南野遺跡第 5 次調査の成果を収録したものである。
2. 発掘調査および出土遺物の整理等は筑後市教育委員会がおこなった。調査関係者は第 1 章に記したとおりである。なお、出土遺物・実測図・写真等は筑後市教育委員会で収蔵・保管している。
3. 本書に使用した図面のうち、遺構実測図は永見秀徳、吉村由美子が、遺物実測図は、丸山裕見子、中島朋子（元興寺文化財研究所）が作成した。また、製図は、丸山、永見が行なった。
4. 本書に使用した写真は、遺構写真は永見、吉村が、遺物写真を永見が撮影したが、全体写真等は(株)空中写真企画に委託した。
5. 本書での報告にあたり、遺構番号を次のように決定した。調査時につけた遺構仮番号を生かし、頭に調査回数、遺構種別を加えた。今回は第 5 次調査であるため、S-1 が溝である場合、5SD01 となる。
6. 本書に用いた方位はすべて G.N. を、水準は T.P. を基準としていて、座標は第 II 座標系に属している。また、座標値は世界測地系（測地 2000）によった。なお、遺構の主軸等の方位は実測図上で分度器を用いて計測した。北から 45° 東にあたる場合、N-45°-E と表記した。
7. 本書の執筆および編集は永見が行なった。

目 次

第 I 章	はじめに	1
第 II 章	位置と環境	3
第 III 章	調査成果	5
第 IV 章	まとめ	13

第I章 はじめに

本書は、平成19年度に実施した山ノ井南野遺跡第5次調査の成果を収録したものである。この調査は、店舗新築工事によって消滅する部分について記録保存の措置をとったものである。

平成18年度に、建築主から筑後市教育委員会に対して、当該地での店舗建築に関して照会がなされた。筑後市教育委員会では、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地（山ノ井南野遺跡）内であることを回答し、着工前に埋蔵文化財発掘の届出が必要であることと、また工事の内容によっては記録保存の措置を講ずるため本発掘調査の必要があることを通知した。

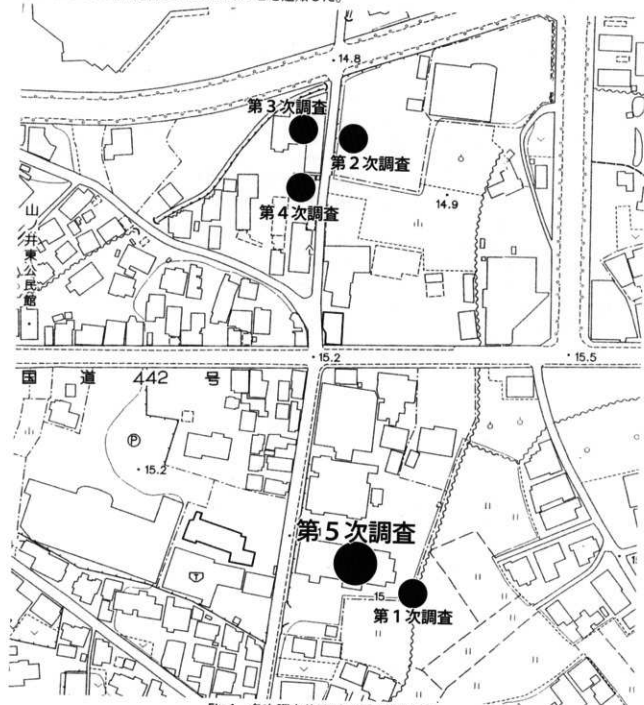


Fig.1 各次調査位置関係図 (1/2,500)

この回答を受けて建築主と筑後市教育委員会は協議の結果、工法の変更は不可能で、建物敷地部分は遺構の破壊が免れないこととなった。そのため、当該部分のみ記録保存のための本発掘調査を実施し、係る費用は建築主が負担することで合意した。

しかしながら、本調査は平成18年度中に取りかかることができない状況であったので、平成19年度のできるだけ早い時期から取り掛かることで、協議が整った。そこで平成19年度当初に埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、平成19年4月3日から調査に着手した。5月の連休を挟み、6月18日までで現地の調査を完了した。

出土遺物の整理と報告書刊行作業は、現地の調査完了後に着手し、平成20年3月31日までの期間で実施した。作業のうち、遺物洗浄、遺物接合、遺物実測、遺物復元、製図の各作業は財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

また、調査体制は以下のとおりであった。

総括 筑後市教育委員会	教育長	城戸 一男
	教育部長	平野 正道
	社会教育課長	田中 僚一
	文化スポーツ係長	北島 鈴美
庶務	文化スポーツ係	小林 勇作 (文化財専門職)
		上村 英士 (々)
		永見 秀徳 (文化財専門職)
調査担当	文化スポーツ係	吉村由美子 (文化財学芸員)

なお、現地での調査から報告書刊行に到るまで、以下の方の御指導御助言を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同・敬称略)

水野正好 (前:奈良大学)、佐田茂 (佐賀大学)、岸本圭 (福岡県教育庁)、大塚恵治 (八女市教育委員会)

第Ⅱ章 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の南西部にあたる。市域をJ R 鹿児島線と国道 209 号が縦断し、国道 442 号が横断する。また、市南部には一級河川の矢野川、中央部には山ノ井や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜め池が点在する。低位扇状地である東部や低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中央部に形成されている。



Fig.2 周辺主要遺跡分布図 (1/50,000)

まず旧石器時代であるが、蔵数坂口遺跡や鶴田東大坪遺跡等で遺物が出土している。しかしながら、遺構の発見には到っていないため、当時の様相はほとんど不明である。つづく縄文時代であるが、筑後市内では縄文時代の遺跡は市の南部域に集中することが判っている。ただし、例外的に落し穴は全域に分布する。特に鶴田岸添遺跡や久恵内次郎遺跡では、多数の落し穴を検出している。また、津島九反坪遺跡・志前田遺跡・鶴田岸添遺跡・久恵中野遺跡等では、早期のものと思われる石組炉も発見されている。さらに、尾島集落の北側には縄文時代の集落として著名な裏山遺跡がある。

次の弥生時代であるが、中期初頭までの集落は、縄文時代と同様に市域の南半部に偏って分布する傾向が強い。中期も後半に入ると、北部の丘陵上や南部の低平地へも展開して遺跡数は爆発的に増加する。前期から中期初頭の遺跡では、常用長田遺跡や常用日田行遺跡等が著名で、前期の溜井も津島九反坪遺跡で確認されている。中期後半以降の集落は、蔵数森ノ木遺跡が特に著名である。また、低平地への展開例では津島皿ヶ町遺跡がある。また、鶴田岸添遺跡では火災で消失した竪穴住居も確認されている。

古墳時代は、市北部の石人山古墳、欠塚古墳、瑞王寺古墳が良く知られている。集落遺跡では、弥生時代から継続している蔵数森ノ木遺跡や久富島居遺跡、鶴田西畑遺跡、津島南佛生遺跡等がある。集落の基本的な立地は、弥生時代後半のそれを踏襲する。

筑後市域は、古代には交通の要衝として認知されていたようで、古代官道の西海道が南北に縦断する。発掘調査でも、鶴田中市ノ塚遺跡、山ノ井井川口遺跡、羽犬塚山ノ前遺跡、山ノ井南野遺跡等で確認された。延喜式にある葛野駅は筑後市附近にあったと考えられていて、最有力候補地は羽犬塚中学校附近である。羽犬塚中道遺跡では「□郡符葛□」と墨書された土師器も出土している。また、若菜森坊遺跡では竪穴式住居によって構成される大規模な集落が確認されている。

中世には、館跡を中心に調査事例が増加している。この時期には社寺領を中心に荘園が発達し、その支配を基盤にした社会が形成される。これは当地域の特徴のひとつといえよう。具体的には、市域の北半部から隣町の広川町にかけて熊野領の広川荘が成立し、その中心は筑後市の熊野であった。また市の南東部には郡名荘である上妻荘があり、南西部には安楽寺領の水田荘・下妻荘が成立する。水田荘の中心には老松宮（のちに水田天満宮）が置かれ、それを中心に水田六院が栄えた。

これら荘園の境界附近には、屋敷や坊といった小字名が残り、対峙する各荘園が配した屋敷地であるとみることができる。長崎坊田遺跡や、若菜森坊遺跡、井田西中野遺跡などがこれにあたる。

近世には、在郷町がつくれ、特に羽犬塚町は宿町とも呼ばれ栄えた。有馬藩の三宿に数えられ、御茶屋が置かれるなど、発展を遂げた。また、農村集落の事例として四ヶ所古四ヶ所遺跡もある。

転じて、山ノ井南野遺跡の周辺を見てみたい。何といても山ノ井南野遺跡第3次調査や第4次調査で発見された西海道跡が目される。しかしながら、当遺跡周辺では、道路本体を別にすれば、官道に関連するような遺構は認められていない。

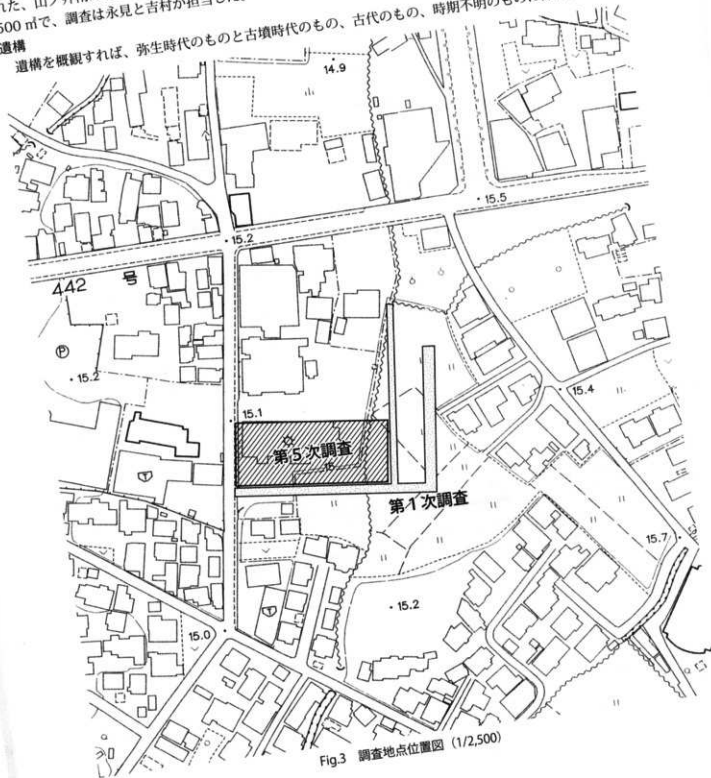
参考文献

『筑後市史』 筑後市史編纂委員会 1998

第三章 調査成果

山ノ井南野遺跡第5次調査は、店舗の建設に先立ち、記録保存を目的として実施したものである。今回の調査区は、分譲地全体を開発した際に、道路および水路部分を対象に平成14（2002）年に実施された、山ノ井南野遺跡第1次調査の調査地点に隣接するかたちで設定された。調査対象面積は、約2,500㎡で、調査は永見と吉村が担当した。

遺構を概観すれば、弥生時代のものと同墳時代のもの、古代のもの、時期不明のものに分かれるよう



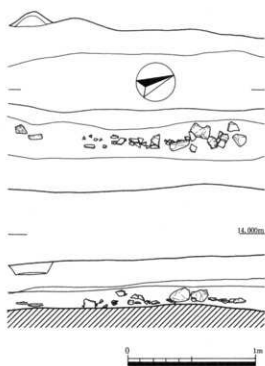


Fig.4 5SD01 遺物出土状況実測図 (1/30)

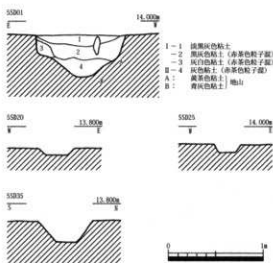


Fig.5 5SD01・5SD20・5SD25・5SD35 実測図 (1/40)

土坑

大溝(5SD30)の西に近接して確認した。やや大振りな土坑を、小振りな土坑7基が取り巻くように展開している。

SSK06 (Fig.7, Pla.4・5)

調査区の中央やや南に位置している。平面形状は北西側の幅が広い略台形を呈していて、長軸1.3m短軸0.9m深さ0.2mを測る。底面は、長軸0.9m短軸0.5mの平坦面を形成している。黒色粘質土の単一埋土であった。

出土遺物は、土師器(坏・片)がある。

である。報告では取って時代別には報告せず、遺構種別・遺構番号順での報告を基本とした。ご了解願いたい。

溝状遺構

5条を検出した。うち1条は大溝である。

5SD01 (Fig.4・5, Pla.3)

調査区の東よりを南北に走る溝である。造成前にあった水路と概ね平行して走っている。断面は概ね逆台形を呈し、幅1.0m深さ0.5mを測る。調査区の中程で西側に蛇行するが、その部分では断面形状も乱れを生じ、崩れた逆台形となっている。

出土遺物は、弥生土器(甕・片)・須恵器(甕・坏・片)・土師器(皿・坏・片)・黒曜石(剥片石器・剥片)・チャート(剥片)・台石・石片がある。

5SD20 (Fig.5)

調査区の南東を南北に走る溝である。断面は概ね逆台形を呈し、幅0.4m深さ0.1mを測る。5SD25と概ね平行して走る。

出土遺物は、サヌカイト(鐵)がある。

5SD25 (Fig.5)

調査区の南東を南北に走る溝である。断面は概ね逆台形を呈し、幅0.3m深さ0.1mを測る。5SD20と概ね平行して走る。

出土遺物は、認められなかった。

5SD30 (Fig.5・6)

調査区の中央を概ね南北に走る大溝である。クランク状に屈曲して蛇行し、断面は概ね逆台形を呈し、幅4.5m深さ0.7mを測る。

出土遺物は、土師器(高坏・壺・甕)・須恵器(蓋・甕)木片・桃?種子がある。

5SD35 (Fig.5)

調査区の北よりを北西から南東に走る溝である。南東側で5SD30に合流する。断面は概ね逆台形を呈し、幅0.6m深さ0.2mを測る。

出土遺物は、土師器(坏)がある。

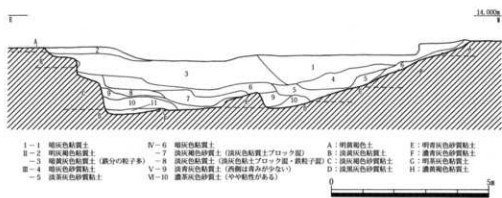


Fig.6 S5D30 土層断面実測図 (1/60)

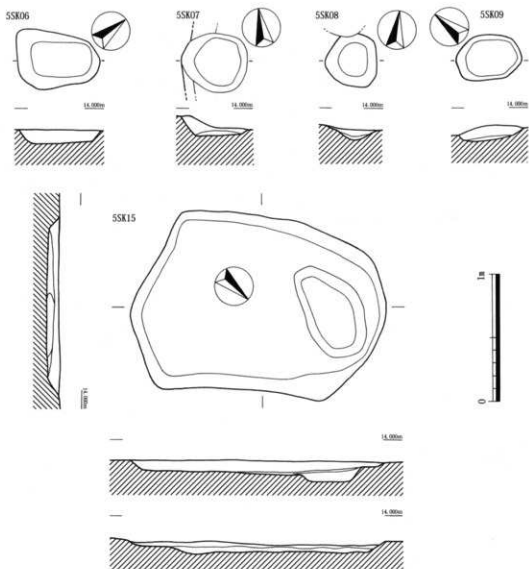


Fig.7 土坑実測図 (1/60)

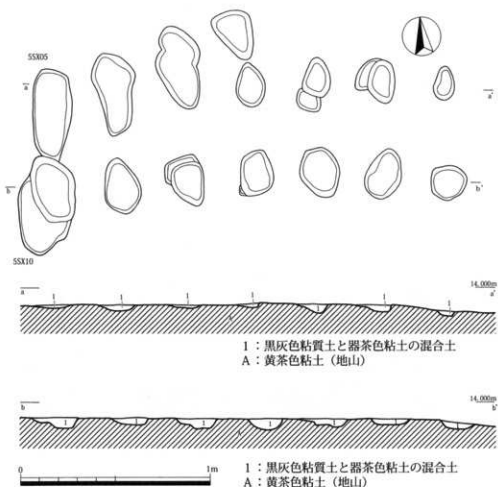


Fig.8 連続土坑実測図 (1/40)

SSK07 (Fig.7, Pla.4・5)

調査区の中央やや南に位置している。平面形状は略円形を呈していて、長軸 1.3 m 短軸 0.9 m 深さ 0.2 m を測る。底面は、長軸 0.9 m 短軸 0.5 m の平坦面を形成している。黒色粘質土の単一埋土であった。

出土遺物は、認められなかった。

SSK08 (Fig.7, Pla.4・5)

調査区の中央やや南に位置している。平面形状は略円形を呈していて、東西 1.0 m 南北 0.9 m 深さ 0.3 m を測る。底面は、東西 0.7 m 南北 0.7 m の平坦面を形成している。黒色粘質土の単一埋土であった。

出土遺物は、認められなかった。

SSK09 (Fig.7, Pla.4・5)

調査区の中央やや南に位置している。平面形状は略方形を呈していて、一辺 0.8 m 深さ 0.2 m を測る。底面は、南北 0.5 m 東西 0.4 m の平坦面を形成している。埋土は、黒色粘質土の単一埋土であった。

出土遺物は、認められなかった。

出土遺物は、土師器 (甕・皿・坏) がある。

SSK15 (Fig.7, Pla.4・5)

調査区の中央やや南に位置する、大振りの土坑である。平面形状は南東側が広い略台形を呈していて、長軸 4.0 m 短軸 2.8 m 深さ 0.2 m を測る。底面は、長軸 3.7 m 短軸 2.4 m の平坦面を形成していて、長軸 1.5 m 短軸 0.9 m 深さ 0.2 m の掘り込みが認められる。

出土遺物は、須恵器 (蓋)・土師器 (高坏・片) がある。

連続土坑

調査区の南東で、2条を確認した。2条は近接して平行している。

5SX05 (Fig.8, Pla.6)

調査区の南東に位置している。東西方向に7個の土坑が連続して認められた。各々の土坑の径は0.5乃至0.7mで、深さは概ね0.1m前後である。

いずれの土坑からも、出土遺物は認められなかった。

5SX10 (Fig.8, Pla.6)

調査区の南東に位置している。東西方向に7個の土坑が連続して認められた。各々の土坑の径は0.5乃至0.7mで、深さは概ね0.1m前後である。

いずれの土坑からも、出土遺物は認められなかった。

出土遺物

今回の調査では、竪穴住居跡を中心にバンコンテナー1箱分の遺物が出土した。以下、遺構ごとに報告したい。なお、遺物の詳細については出土遺物観察表によっていて、本文には観察表で表現しきれない部分や、特徴的な部分を中心に記載した。したがって、本文中では詳しく触れない遺物もあるので注意されたい。

5SD01 出土遺物 (Fig.9, Pla.7)

土師器、須恵器、黒曜石、チャート、摺り石を報告する。遺構掘削時に層序に従って出土遺物の取り上げをおこなったので、層序別に報告したい。

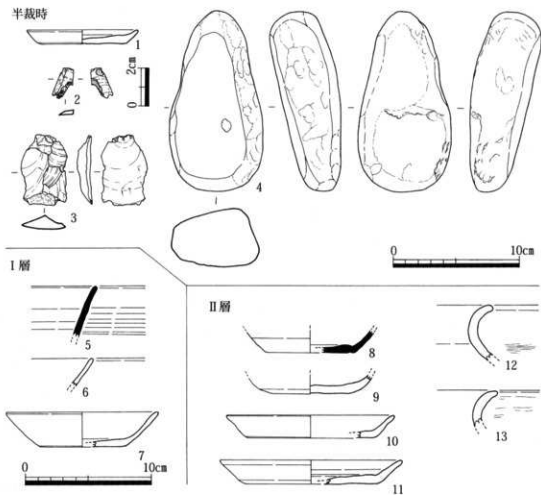


Fig.9 5SD01 出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/6)

半裁時出土遺物

1～4は半裁時出土遺物である。1は土師器の皿である。全体の1/3程が残存する資料である。器面の摩擦が著しく、調整は不明である。2は黒曜石の鎌であろう。剥片を再加工したものか。石材は腰岳産だと思われる。3はチャートの剥片石器である。石材の産地は不明である。4は摺り石と思われる花崗岩である。平滑になっている部分があり、使用痕跡と考えている。

5～7は1層出土遺物である。5は須恵器の坏である。口縁部の資料で、直線的に開く口縁が特徴的である。全面的に横ナデ調整が施されていて、外面には横ナデの調整痕が明瞭に残っている。6と7は土師器の坏である。6は口縁部の資料である。7は全体の1/8程が残存しているが、器面の摩擦が激しく調整は判然としない。

8～13はII層出土遺物である。8は須恵器の坏である。外底面は、鑿切りの後にナデを施している。9～13は土師器である。9は坏である。器面の摩擦が激しく、調整は不明である。10と11は皿である。10は口縁部が1/6残存する資料で、外底面は回転鑿削が施されていると思われる。11は全体の1/4が残存する資料で、調整は全く不明である。12と13は甕の口縁部である。いずれも外反する口縁部の細片で、横ナデ調整を基本とする。12は、屈曲部から下位の体部内面は鑿削りの痕跡を残し、体部外面には刷毛目が認められる。13は屈曲部から下位の内面にナデ調整を認め、口縁部の外面に刷毛目がある。

SSD20 出土遺物 (Fig.10・Pl.7)

サヌカイト製の鎌が出土した。完形の資料である。石材は多久産と思われる。

SSD30 出土遺物 (Fig.10・Pl.7)

土師器(高坏・壺・甕)、須恵器(甕)が出土した。遺構掘削時に層序に従って出土遺物の取り上げ

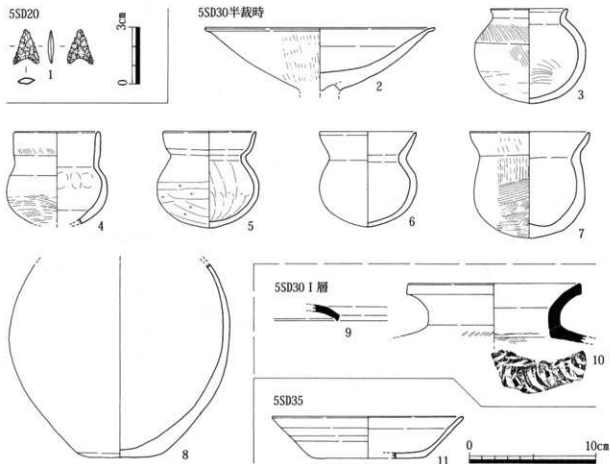


Fig.10 SSD20・SSD30・SSD35 出土遺物実測図 (1/2・1/3)

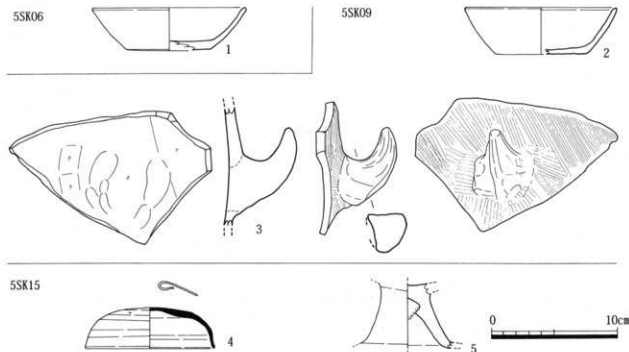


Fig.11 土坑出土遺物実測図 (1/3)

をおこなったので、層序別に報告したい。

2～8は半裁時出土遺物で、すべて土師器である。2は高坏の坏部で、1/3が残存している。外面は刷毛のち横ナデ調整で、内面は摩滅が著しく調整は不明である。3～7は小型丸底甕である。4は全体の1/3程が残存し、それ以外は口縁部の一部が欠損するものの概ね完形である。3は無頸に近い短頸の甕で、体部外面の上位は刷毛、下位は篋削りを施している。内面は上位が横ナデ、下位がナデである。4は口縁部が直立する類型で、体部上位内面には指頭圧痕が認められる。口縁部は横ナデ、体部内面はナデ、体部外面は刷毛目を施している。5は口縁部が二重口縁状に屈曲するもので、体部外面下位は篋削を施している。体部内面には縦方向の強いナデの痕跡が残る。また体部外面には黒斑が認められる。6と7は口縁部が外方に開きながら立ち上がる資料である。6は口縁部の横ナデ以外は、器面の摩滅が著しく調整は不明である。7は口縁部を横ナデ、体部外面をナデ、体部内面をナデ調整によっている。8は甕で、体部の1/2が残存する資料である。全体的に器面の摩滅が著しく、調整は不明である。

9と10は1層からの出土で、いずれも須恵器である。9は蓋で、口縁部に返りがある類型である。口縁部の細片であるため、法量等は不明である。10は甕で、口縁部の1/4が残存する資料である。口縁部は外反し、淡部には明瞭な面を形成する。体部外面には平行叩き、体部内面には同心円文叩きを施している。

55D35 出土遺物 (Fig.10)

11は土師器の坏で、全体の1/3が残存する。直線的に外方に開く体部が特徴的で、口縁部は僅かに肥厚する。摩滅が激しく、器面調整は不明である。

55K06 出土遺物 (Fig.11・Pl.7)

1は土師器の坏で、全体の1/6が残存する。底部は回転篋削を施しているが、それ以外の調整は、器面の摩滅が著しく不明である。

55K09 出土遺物 (Fig.11・Pl.7)

土師器を報告する。2は坏で、全体の1/4が残存する。底部は回転篋削りの痕跡を残すが、それ以外は横ナデを施している。3は甕の把手部分である。把手は体部に差し込んで固定している。

55K15 出土遺物 (Fig.11・Pl.7)

須恵器と土師器を報告する。遺構掘削時に層序に従って出土遺物の取り上げをおこなったので、層序別に報告したい。

第IV章 まとめ

今回の調査は、2,500 m²という比較的大きな範囲を調査した。しかしながら、遺構の密度が粗く、ひとつのまとまった生活痕跡としてとられることが難しい調査であった。その中で、大溝に近接して検出した土坑群について若干の考察を加えて、今回の調査のまとめに代えたい。

土坑群

調査区の中央部南端附近に、Fig.13のように大型の土坑1基と小型の土坑7基を認めた。位置関係を確認すると、大溝 5SD30の西岸すぐのところの大型の土坑 5SK15がある。さらに 5SK15を取り囲むように 5SK06をはじめとして、遺構番号を与えていない土坑を含めて7基の小振りな土坑が配置されている。5SD15は長軸を北西に振っていて、大溝 5SD30の方位とは統一性は認められない。また、土坑群は大溝 5SD30 脇の斜面を平坦に整地してから穿たれたと考えられ、土坑群の配置された部分だけを半円形に削って平坦面を生み出している。

出土遺物は、5SK06、5SK09、5SK15のみしか出土していない。そのため、時期の判定については慎重になるべきであるが、現状で得られた情報から考察を加えてみたい。まず、5SK15のI層からは、古墳時代後期の所産と思しき須恵器の蓋が出土している。またII層からは、やはり古墳時代後期頃の高坏の脚部も出土している。一方、5SK06と5SK09からは古代の土師器（坏）が出土していて、5SK15が先行して存在し、しばらくの時間差を置いて5SK15を取り巻くように小振りな土坑群が穿たれた可能性を指摘できる。

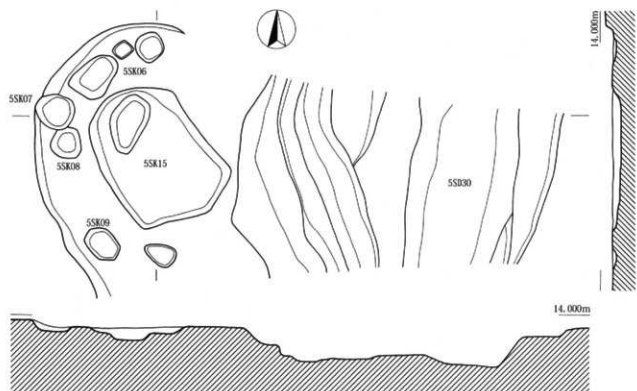


Fig.13 土坑位置関係図 (1/100)

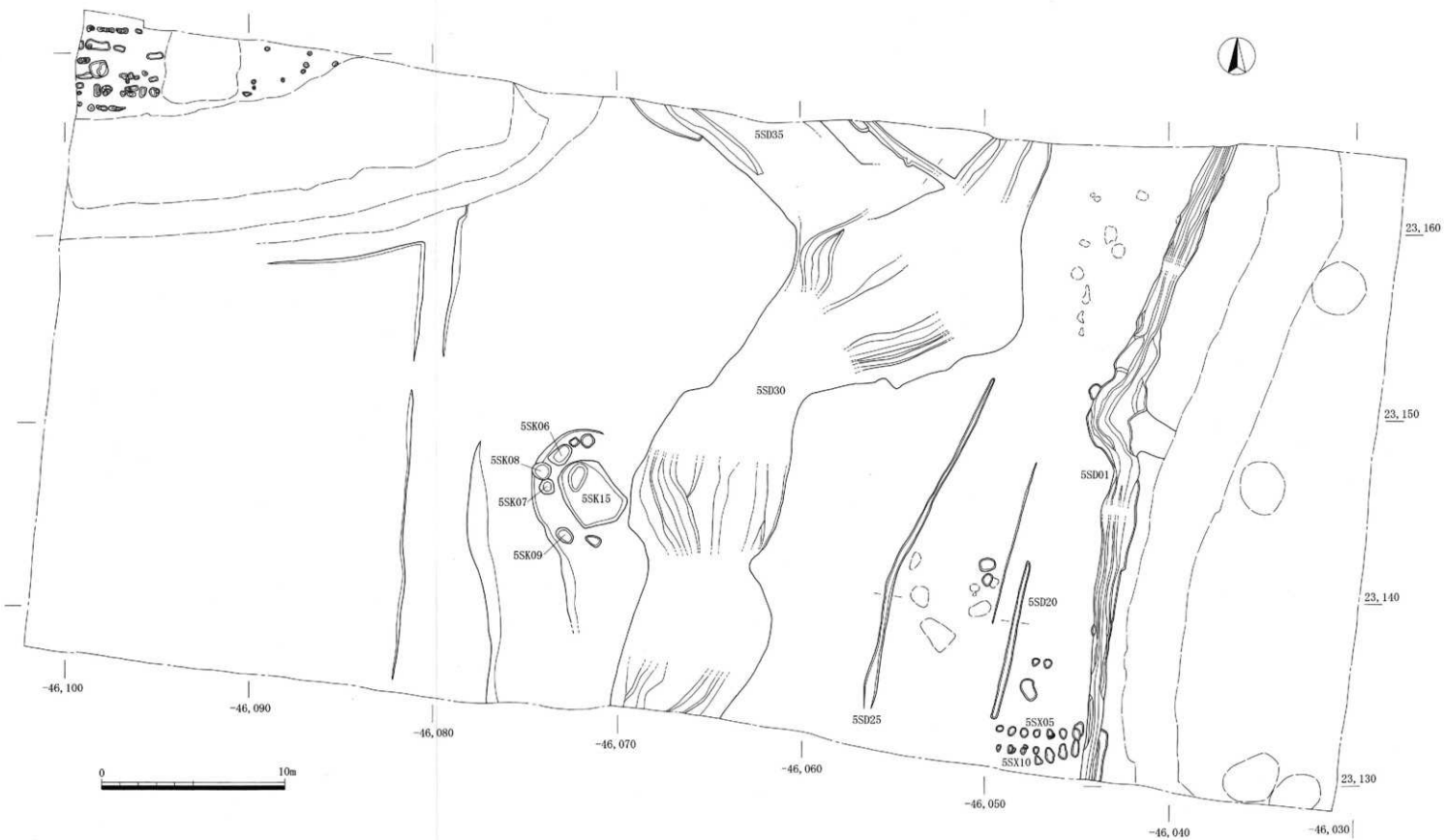
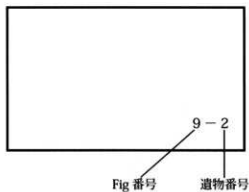


Fig.14 遺構全体配置図 (1/200)

PLATE 写真図版

凡例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりとなっている





調査区全景（上が北）



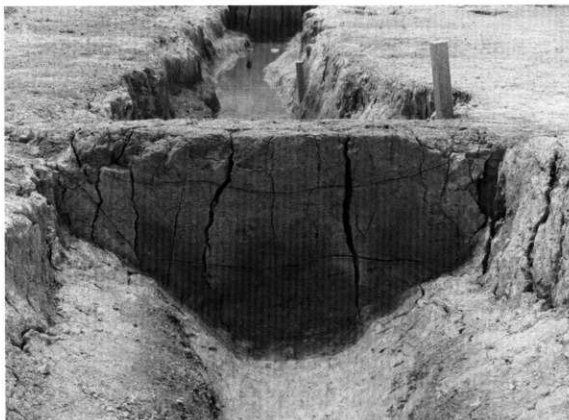
調査区全景（東北東から）



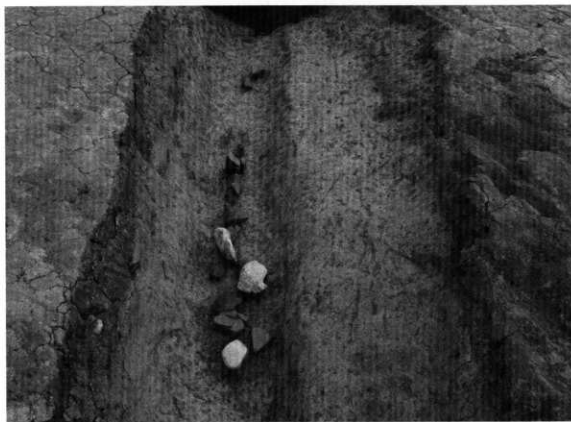
調査区全景（東から）



5SD01 完掘状況（北から）



5SD01 土層断面（北から）



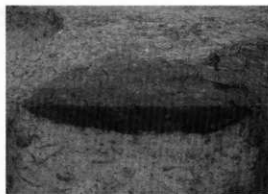
5SD01 遺物出土状況（南から）



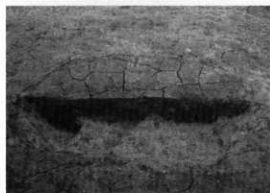
土坑群完掘状況（西から）



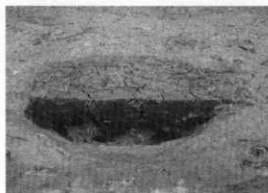
5SK04 土層断面（北西から）



5SK06 土層断面（南西から）



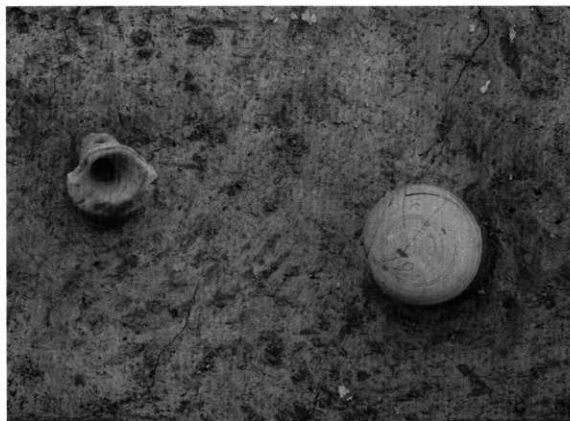
5SK08 土層断面（南西から）



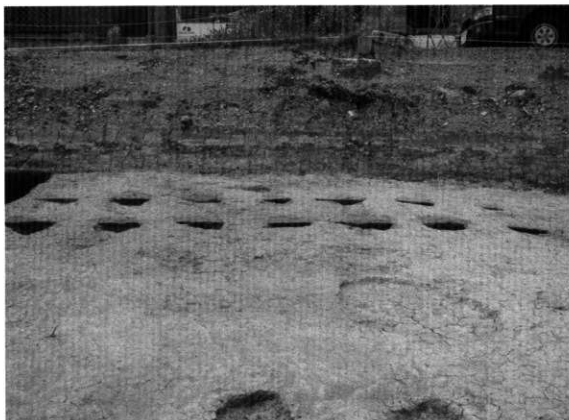
5SK09 土層断面（北東から）



5SK15 土層断面 (東から)



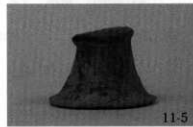
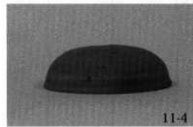
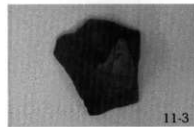
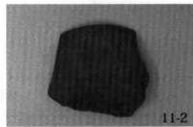
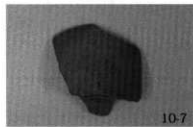
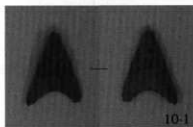
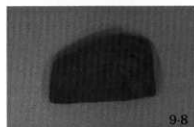
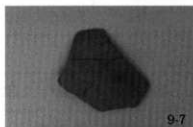
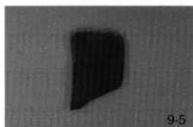
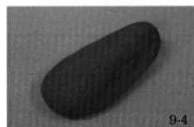
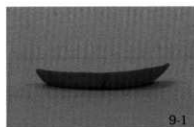
5SK15 遺物出土状況 (東から)



5SX05・5SX10 土層断面（北から）



5SX05・5SX10 完掘状況（西から）



山ノ井南野遺跡Ⅳ

福岡県筑後市大字山ノ井所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書

第 86 集

平成 20 年 3 月 31 日 発行

発行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井 898

印刷 大同印刷株式会社

佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20

TEL 0952-71-8520 代